

優れた芸術の魅力を伝えるとともに、独自のコレクションを後世に伝える

要求水準－収集・保存

収集方針に基づき資料を収集し、適切な保存・管理を行う

評価項目

- (1) 本県出身の作家を中心として、特色ある資料の充実に努める
- (2) 資料の整理・分類、点検・劣化防止等の処置を適切に行う

状況説明

(1) 本県出身の作家を中心として、特色ある資料の充実に努める

- ・国内外で評価が高い本県美術家・岡上淑子の作品 2 点を購入し、29 年度開催の回顧展「岡上淑子コラージュ展」実現への重要なステップとした。
- ・本県ゆかりの作家では、幸徳秋水の甥で、洋画家・幸徳幸衛の最重要作「眼のない自画像」をはじめ、洋画家・西岡瑞穂の油彩画や彫刻家・船木直人の木彫等 12 点の寄贈を受けた。
- ・南国市札幌地区町内会から絵金派屏風 4 点の寄贈を受け、幕末維新博関連事業として開催したコレクション・テーマ展「もうひとつの絵金－芝居絵屏風をめぐる土佐の文化－」において披露した。

(2) 資料の整理・分類、点検・劣化防止等の処置を適切に行う

- ・収蔵作品・資料は、可能な限り素材ごとに分類し、24 時間空調による温湿度管理のもと収蔵庫で適正に管理している。石本泰博作品に関しては、プリント作品はその他の収蔵作品同様に収蔵庫で、フィルムはフォトセンター専用保管庫で管理している。
- ・展示室及び石元泰博フォトセンターの展示では、監視カメラや警報システムによる警備とともに、受付員や監視員を配置し、作品の安全確保を行っている。
- ・書庫・アート情報コーナーでは、企画展内容に沿った図書の特集や全国の美術館等の図録、一般美術図書類の公開を行うとともに端末PCを設置して石元泰博作品画像の一部公開した。また、旧ライブラリーからの蔵書の移管、台帳更新も引き続き行った。
- ・その他全国美術館会議の保存研究会への参加など、職員の保存科学に関する資質の向上を図るとともに、定期的に「環境モニタリング調査」を行うことで館内の状態を把握し、必要に応じて専門業者による燻蒸を実施するなど保存、展示に適した環境維持に努めた。

評価案	理由
A	<ul style="list-style-type: none"> ・収集方針に則り、本県ゆかりの作家の代表的作品を収集することができている。 ・劣化が進む絵金派屏風の寄贈を受入れ、修復を施すことで、県の貴重な文化資源を次代に継承していく美術館としての役割を果たしている。 ・収蔵庫の保存環境保全に努め、適切な方法で収蔵資料を保管するとともに防犯セキュリティ面でも収蔵庫、展示室等の安全が図られている。

要求水準－調査・研究

収蔵資料の調査研究を進め、その成果を公開する

評価項目

- (1) 職員の専門性の向上を図るとともに、調査研究の成果を、資料の公開や図録・記録集の作成等により、広く発信する
- (2) 石元泰博コレクションの調査・研究を進め、適切な利活用を図る

状況説明

(1)職員の専門性の向上を図るとともに、調査研究の成果を、資料の公開や図録・記録集の作成等により、広く発信する

1)調査・研究会

- ・全国美術館会議の保存研究、教育研究、地域美術研究の各部会に参加し、学芸員の資質向上を図るとともに、県内の教育機関やギャラリー等で学芸員が講義やレクチャーを行うなど連携を深めた。
- ・ホール担当者が、国際交流基金アジアセンター主催の「次世代プロデューサー育成事業」に指名され、タイ、マレーシア、インドネシア、フィリピンの若手プロデューサーと共に東京芸術見本市に全日程参加。ディスカッションを通じてプロデューサーとしての能力向上を図った。

2)展覧会等

- ・ブラジルのモレイラ・サーレス財団の協力、ブラジル現地での調査研究のもと実現した「大原治雄写真展」は、NHK「日曜美術館」で特集番組が組まれるなど、県出身写真家の存在を大きくアピールすることができた。
- ・「日本におけるキュビズム」展の図録は、美術館連絡協議会の「2016年優秀カタログ賞」を受賞した。
- ・コレクション・テーマ展では、南国市札幌地区町内会から寄贈を受けた絵金派屏風 4 点の修復報告展示を行った。

3)高知の移民文化発信プロジェクト

「大原治雄写真展」を基軸として、県内 10 の文化施設と連携したプロジェクトを約一年間にわたり展開。各施設が独自に調査等を行った成果の展示やレクチャーなど、数多くの事業を通年でを行い、それらの記録集を美術館連絡協議会からの助成を得て発行した。

4)アーティスト・イン・レジデンス

フィンランドセンターの協力を得て、フィンランドから振付家と照明デザイナーを招聘し、アウトリーチやワークショップを重ねて作品を創作したうえ、公演を行い、それらの報告書を作成した。

(2)石元泰博コレクションの調査・研究を進め、適切な利活用を図る

石元泰博フォトセンター事業実施5か年計画の3年目として、主たる三つの活動である深める(保存管理、調査研究、収集)、広める(展示公開、著作権管理)、つなぐ(教育・普及)を本格的に展開した。また、著作権利用許諾についても、利用者の円滑な利活用になるよう手続きを行った。

1)「深める」活動

- ・総数 34,753 枚のうち、4,811 枚を複写し、年度内に全枚数の複写を完了した。次の段階である重複作品との照合確認を継続して行った。
- ・複写後のプリント作品情報のデータ入力(ファイルメーカー)を行った(進捗率 78%)。
- ・プロカメラマンによる高精彩プリント作品複写を 713 枚、保管庫管理フィルム 2,020 枚をデジタル化した。
- ・フィルム包材取り換えの実施や公開用データベース構築するため基礎資料の文献調査を行った。
- ・建築家・磯崎新氏、内藤廣氏の事務所やアメリカのゲティセンター、全米日系人博物館を訪問し、石元泰博に関する資料調査を行った。

2)「広める」活動

- ・コレクション展として、「再現：ディオゲネス・ウィズ・ア・カメラV」、「なかまーシカゴの学生時代」、「かたち」をテーマに、前後期で展示替えを行い、計6回合計 205 点の主要作を紹介した。
- ・コレクション展ごとに高品質な作品画像とミニエッセイを掲載したパンフレットを制作・配布した。

- ・展示室内のタブレットで 1,426 点、アート情報コーナーの PC で約 17,000 点の作品画像公開を行った。
- ・著作権の利用許諾・管理業務として、48 件の相談などを受付け、結果 29 件の利用につなげた。
- ・専門の弁護士や学者を招いて石元泰博作品を基軸としたアート・アーカイブ及び著作権に関するトーク・イベントを開催した。
- ・米国ハンテントン・ライブラリー「石元泰博展」に主要作品 46 点を貸出した。学芸員が展示、撤収時に現地に赴き、展示指導などを通じて現地関係者との交流を深めた。その他、フランスのカルティエ現代美術館に作品 12 点を貸出した。

3)「つなぐ」活動

- ・石元泰博氏の故郷、土佐市の教育委員会と協定を締結して連携体制を強化し、管内 2 つの小学校を対象に、事前授業と美術館へチャーターバスで招待する「スクール・プログラム」事業を行った。また、「山の手ふれあいフェスタ」に参加し、展覧会広報等を行った。
- ・フォトセンター専用ウェブサイトを定期更新し、コンテンツを増やした(閲覧者数 6,253 ページビュー)。

評 価 案	理 由
A	<ul style="list-style-type: none"> ・自主企画展や他館との共同企画展など、多様な企画メニューで展開している。「大原治雄写真展」ではNHK「日曜美術館」で特集番組が生まれ、「日本におけるキュビズム」展では図録が美術館連絡協議会の「2016 年優秀カタログ賞」を受賞するなど成果を上げている。 ・ホール事業では、海外アーティストのレジデンス招聘や交流など活発な活動を進めている。 ・石元泰博フォトセンターでは、氏の故郷である土佐市の教育委員会と協定を結び、子どもたちが作品の魅力と郷土の偉人について学ぶ機会を提供するとともに、作品の借用申請等を通じてアメリカやフランスなどの美術館と連携を深め、作品を広く紹介するなど、情報発信と利活用促進の活動が出来ている。

要求水準－展示・公開

質の高い、優れた芸術に触れる機会を提供し、芸術や文化に対する関心を深める

評価項目

- (1) 世界有数のシャガールコレクションの展示など、質の高い魅力的な常設展・企画展を開催し、5年間で25万人以上の観覧者を目指す
- (2) ホールの特性を生かした事業を実施し、美術館の魅力向上に努める
- (3) 講演会やギャラリートークの実施など、来館者の芸術や文化への理解を深めるためのサービスを充実させる

状況説明

(1) 世界有数のシャガールコレクションの展示など、質の高い魅力的な常設展・企画展を開催し、5年間で25万人以上の観覧者を目指す

1) コレクション展

- ① シャガール・コレクション展 6回の展示で総出品数 185点。中でも、モノクロームの版画に手彩色を施した作品《ラ・フォンテーヌの「寓話」》や普及版よりも図版が一枚多く、各葉の段階刷りも加えられた特装版《アラビアンナイトからの四つの物語》など、唯一無二のコレクションとして特色ある展示を行った。
- ② 石元泰博・コレクション展 3つのテーマで作品を精選、展示した(6回の展示で総出品数 205点)。
- ③ コレクション・テーマ展 「土方久功展—南洋の光と影」(総出品数 80点)。「鳥にうっとり♡」(総出品数 54点)。「高知の戦後美術」(総出品数 45点)。

2) 企画展

- ① 「大原治雄写真展—ブラジルの光、家族の風景」いの町からブラジルに渡り、ブラジルを代表する写真家となった大原治雄の偉業を紹介する展覧会を当館を幹事館として全国3会場で巡回した(総出品数 181点)。
- ② 「アール・ヌーヴォーのガラス—デュッセルドルフ美術館 ゲルダ・ケプフ・コレクション」(総出品数 135点)
- ③ 「高橋コレクション マインドフルネス! 2016」日本屈指の現代美術作品コレクター・高橋龍太郎氏のコレクションで日本を代表する作家、高知ゆかりの作家、注目の若手作家まで幅広く紹介した(総出品数 83点)。
- ④ 「日本におけるキュビズム—ピカソ・インパクト」(総出品数 165点)。

(2) ホールの特性を生かした事業を実施し、美術館の魅力向上に努める

① 国際共同製作公演ダレン・ジョンストン「ZERO POINT」ワークショップ 1回 2公演

平成25年にアーティスト・イン・レジデンス事業を行ったイギリスの振付家、ダレン・ジョンストンによる公演を、パービカンセンター(イギリス)、パース国際芸術祭(オーストラリア)との国際共同製作で行った。

② アーティスト・イン・レジデンス&公演「Portable Home—住めば都」1公演、リサーチワークショップ 5回
フィンランドから照明デザイナーと振付家 2人を招聘し、レジデンスと公演を行った。出演者を公募し、「Home(家、ふるさと、本拠地)」をテーマとして、約1か月間にわたり県内でのリサーチやワークショップを重ね、人や風土の特性を組み込んだ作品を制作、開館記念日に発表を行った。

③ 日本・シンガポール・インドネシア国際共同制作「三代目、りちゃあど」1公演

④ アンサンブル・パレット出前クラシック教室&「0歳からのクラシックコンサート」2公演

⑤ カンパニーデラシネラ出前演劇教室&「ドン・キホーテ」3公演

小・中学校での出前演劇教室を経て、美術館ホールで一般向けに新作公演を行った。

⑥ 定期上映会(春夏秋冬)8日間計 13本上映。

⑦ 共催事業 松田弦ギターリサイタル 1回。

東京オペラシティとの共催で、世界的に活躍する県出身ギタリスト、松田弦のリサイタルを行った。

⑧ 「四万十川国際音楽祭 2016」、「演劇祭 KOCHI2016」、「高知オフシアターベストテン上映会 2016」、「高知の移民文化発信プロジェクト」、「熊本地震復興チャリティ上映会」、「お國と五平上演プロジェクト」、「シネマの食堂 2016 オープニング上映会」、「日露交歓コンサート 2016」、「絵の中のぼくの村上映

会)、「中四国アートマネジメント研修会」を共催、地域の芸術文化活動の発展に貢献した。

(3) 講演会やギャラリートークの実施など、来館者の芸術や文化への理解を深めるためのサービスを充実させる

企画展・コレクション展で、担当学芸員及び解説補助員がギャラリートークを実施した(総回数 157 回、総参加者数 969 人)。また企画展、公演などに合わせて、作家本人や研究者、美術館関係者を招いての講演会、レクチャー、ワークショップ等を開催した。

- ・「大原治雄写真展」では、モレイラ・サーレス財団のセルジオ・ブルギ氏による「大原治雄作品の魅力について」と題する講演(参加者 52 人)、NHK制作局ディレクター酒井邦博氏及び早稲田大学移民・エスニック文化研究所招聘研究員中村茂生氏による「高知とブラジル移民、大原治雄の足跡を訪ねて」と題するレクチャー(参加者 54 人)を開催した。
- ・「アール・ヌーヴォーのガラス」展では、牧野植物園の解説員と美術館学芸員による「ガラスに描かれた植物観察会」を開催した(参加者 16 人)。
- ・「高橋コレクション展」では、「現代アートの魅力について」と題し、本展コレクターの高橋龍太郎氏と出品美術作家の松井えり菜氏による対談を開催した(参加者 115 人)。
- ・「日本におけるキュビズム」展では、「キュビズムは二度死ぬ、あるいは死なない」と題し、企画展発案者の鳥取県立博物館副館長、尾崎信一郎氏による講演会を開催した(参加者 46 人)。
- ・「大原治雄写真展」では、写真家の高橋正徳氏による「こどもの日にこどもの写真を撮ろう!」と題するワークショップを行った(参加者 10 人)。
- ・「アール・ヌーヴォーのガラス」展では、照明デザイナーの木藤歩氏による「とおる・はねかえる・ひろがる 光とガラスの実験室」と題するワークショップを行った(参加者 30 人)。
- ・「高橋コレクション展」では、出品美術作家の竹崎和征氏による「えがく、きる、うまれかわる」と題するワークショップを行った(参加者 15 人)。
- ・「日本におけるキュビズム」展では、造形教室スタッフの井関さおり氏、国吉晶子氏によるワークショップ「キュビズム・マスクをつくろう」(参加者 57 人)と美術作家の高橋唐子氏による体操ワークショップ「キュビズム体操」(参加者 25 人)を行った。
- ・「フィンランドのレジデンス」では、作品づくりに向けて 5 回シリーズでワークショップを行った(参加者延べ 68 人)。
- ・「松田弦ギターリサイタル」では、演奏家向けのギターワークショップを行った(参加者 65 人)。
- ・「三代目、りちゃあど」公演では、インドネシア・バリ島から出演しているイ・カデック・ブディ・スティアワンの影絵ワークショップを行った(参加者 18 人)。

評価案	理由
B	<ul style="list-style-type: none">・観覧者年間 5 万人の目標値は達成できていないが、企画展、コレクション展などは、写真・工芸・現代美術・近代美術とバランスの取れたラインナップで実施して、本県ゆかりの作家にスポットを当てるなど作品の選定や構成に工夫を凝らしたものとなっており努力が認められる。企画展やホール公演と連動した講演会、ワークショップやギャラリートークなどイベントの多角的、多面的な理解を促進する取り組みが行われている。・アーティスト・イン・レジデンス事業では、一般の方が出演者や創作側として作品制作に携わり、アーティストとの交流が発展し繋がって行く可能性を上げた。・国内外の施設・団体とのネットワークの構築などが実を結び、世界の舞台芸術の招聘や情報発信、アーティスト・イン・レジデンス事業を通じたアーティストと県民の交流など美術館ホールが長年の活動で培ってきた成果が表れている。

要求水準－教育・普及

様々な年代を対象とした教育・普及活動を行う

評価項目

- (1) 学校や関係機関と連携を図り、子どもたちの芸術や文化に触れる機会を充実させる
- (2) 幅広い年代の方に、芸術や文化に親しむ機会を提供する

状況説明

(1) 学校や関係機関と連携を図り、子どもたちの芸術や文化に触れる機会を充実させる
 学校から来てもらう事業、学校に出向く事業及び教職員対象の事業等学校と連携して行う事業を「スクール・プログラム」として一本化し、それらの成果を報告書にとりまとめた。

- ・学校等各種団体からの施設見学、レクチャーなど(44 団体 2,446 人)
- ・バスの借り入れ費用を支援するミュージアムバス・ツアー(6 校 271 人)
- ・石元フォトセンターは、土佐市高岡第一、第二小学校で事前学習の講座を行い、111 名が来館した。
- ・出前演劇教室として、カンパニーデラシネラによる公演を 4 校で実施し、2校でワークショップを行った。
- ・企画展等に県内の教職員を無料招待する「ティーチャーズ・デイ」を 4 回実施し、学校との連携を深める機会とした。
- ・学芸員資格取得のための実習では、高知大学生など計 10 名を受入れた。

(2) 幅広い年代の方に、芸術や文化に親しむ機会を提供する

- ・幅広い年代層や多様な嗜好を考慮した企画展を行った。また、関連イベントとしてワークショップや講演会等を開催し、講演会等には 6 件 378 名、ブラジル映画上映会に 248 名が参加した。
- ・ギャラリートークの手話通訳や英語通訳、キャプションの工夫、無料託児サービス(4 回、託児数 10 人)などサービスの充実を図った。
- ・ホール事業では、ダンスやギターなど公演をより深く楽しめる内容のワークショップを開催した。
- ・芸術活動の発表の場として県民ギャラリー、美術館ホールの貸し出しを行った(県民ギャラリー: 延べ 30 件、美術館ホール: 延べ 242 件)。
- ・開館記念日には、コレクション展を無料公開し、スペシャル・ギャラリートーク、全国の美術館のポスターや図録の無料配布、フィンランド人アーティストのパフォーマンスなどを行うイベントを開催し、家族や親子連れでの来場促進に努めた(入場者数 3,315 人)。その他、クリスマスイベントとして、ゴスペルの演奏会を(参加者延べ 60 人)、正月企画として琴と三味線の演奏会や福引、能楽入門を開催し(参加者延べ 1,090 人)、多くの方々に美術館に親しんでもらう機会を提供した。

評価案	理由
A	<ul style="list-style-type: none"> ・教育委員会や教員との連携、出前びじゅつ講座、ミュージアム・バスツアー、幼児対象プログラムなどをスクール・プログラムとして実施することで、来館校数、人数とも増加しており効果的な活動となっている。 ・幅広い層の利用者ニーズに合う企画展や公演、その他事業を創意工夫して企画し、ツイッターやフェイスブックなど SNS を活用した情報発信に努め、県内外から新しい来場者層の獲得を図っている。 ・開館記念日、クリスマス、お正月のイベントを充実することにより、幅広い層に対して美術館に親しんでもらう機会を提供出来ている。

評価項目

美術館活動に関する戦略的な情報発信により、県内外に館の魅力を広める

状況説明

1) 広報戦略

- ・月1回の広報部会及び館会議で広報の取組状況を共有し、改善策の検討や展示・ホール事業ごとに、特徴、特性を活かした広報戦略を立案し、実施した。

2) 情報発信

- ・事業の開催情報は、マスコミ等に適宜情報提供し、新聞、情報誌、WEB 媒体などの掲載につなげた。
- ・チラシ、ポスターなど、デザイナーと十分に協議し、洗練された広報ツールとなるよう努めた。
- ・事業の年間スケジュールのリーフレットは、通年の事業が一目でわかるよう、工夫を凝らした。
- ・年 4 回発行の美術館ニュース「ケンビレター」は、「美術館に来てくれる人々に宛てた手紙」をコンセプトに、見どころやエピソードなど親しみや興味を持てる内容に工夫を凝らした。
- ・ホームページ、フェイスブック、ツイッター、メールマガジンなど、多様な方法で情報発信を図った。
- ・二大コレクション、シャガールと石元泰博の作品を紹介するリーフレットを新たに作成し、館の概要リーフレットと併せて多言語化(英語・韓国語・中国語<簡体字、繁体字>・タイ語)し、配布した。

3) 各事業での重点的な取り組み

- ・大原治雄写真展では、県内 10 施設で構成された「高知の移民文化発信プロジェクト」と連携し、「移民文化」をキーワードに多方面にわたる広報を展開した。NHK で、大原治雄を紹介する番組「移民の国に咲いた花～日本・ブラジル 120 年～」が放送され、その後の「日曜美術館」の特集につながったことで、全国的な広報効果が得られた。一般書籍として出版した図録も広く全国に流通し、高く評価された。
- ・アール・ヌーヴォーのガラス展では、テレビや新聞の他、商店街アーケード内の吊看板掲示など多様な広報活動を展開し、夏休みを中心に県内外からの集客を図った。また、アール・ヌーヴォーの主要なモチーフが植物であることから牧野植物園と連携して植物観察会とギャラリートークを合わせたタイアップイベントを開催するとともに、ガラス工芸の専門知識を持つ職員が技法的な側面から展覧会の紹介を行った。
- ・「高橋コレクション マインドフルネス 2016」展では、テレビスポットや大型ショッピングセンターでのデジタルサイネージなど、積極的な広報展開を行った。
- ・「日本におけるキュビズム」展では、地元の新聞やFMラジオでのCMなどで広報を展開するとともに、先行巡回館の埼玉県立近代美術館の協力により、YouTube や当館ウェブサイトで広報動画を放映した。
- ・国際共同製作「ZERO POINT」公演は、SNS の活用など広範囲な広報を行うとともに東京でプレビュー公演(一部シーンの抜粋)と記者会見を行った。音楽、演劇など情報を扱う Web メディアや雑誌に記事や広告を掲載して全国のダンス関係者やファン、県内のバレエ関係者への広報に力を入れた。
- ・0歳からのクラシックコンサートでは、親子が集まる地域のふれあいセンターなどにチラシを配布するなど、早い段階から積極的に動き、2回の公演とも満席となった。

評価案	理由
A	<ul style="list-style-type: none"> ・企画展やホール事業の、それぞれが持つ特徴や特性を活かした広報活動を展開し、ツイッター、フェイスブック、インスタグラムなどのソーシャルメディアも活用して効果的な情報発信が来ている。 ・新聞やテレビなど地元メディアと連携した広報と、雑誌やデジタルサイネージなど予算を投入した広報をバランスよく展開している。

評価項目

県内外の他の博物館等と連携した事業の充実により、県民サービスの向上を図る

状況説明

1)共同企画

- ・「大原治雄写真展」は、ブラジルのモレイラ・サーレス財団との連携のもと、当館制作の自主企画展として伊丹市立美術館、清里フォトアートミュージアムに巡回を行った。
- ・「日本におけるキュビズム」展では、鳥取県立博物館、埼玉県立近代美術館と当館が共同で調査を行い、日本人画家たちにキュビズムがいかに影響を与えたかを深く掘り下げた。

2)作品の貸出

- ・東京ステーションギャラリー他の企画展「動き出す！絵画展」に山脇信徳他の計4点を、また米国ハンティントン・ライブラリーの「石元泰博：バイリンガルの写真展」に石元泰博の代表作46点を貸し出すなど、県内外の企画展7件、計63点の作品展示に協力した。

3)地域のネットワーク

- ・県内では、こうちミュージアムネットワーク、明治維新150年高知県ミュージアム連絡協議会、高知の移民文化発信プロジェクトに参加し、連携を深めた。
- ・県外では、四国美術館会議、四国地区博物館協議会、中四国地区公立文化施設協議会に参加し、会議や勉強会等を通じて連携を深めた。

4)全国のネットワーク

- ・全国美術館会議、日本博物館協会、美術館連絡協議会、公立文化施設協議会、コミュニティシネマセンター、ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク、劇場・音楽堂等連絡協議会に加盟し、各会議、研究会、研修会に参加、交流によって得た見識を地域に還元している。

5)ホール事業の取り組み

- ・「ZERO POINT」ではアーキタンツ(東京)、バービカンセンター(イギリス)、パース国際芸術祭(オーストラリア)、ブリティッシュ・カウンシル、オーストラリア大使館、「フィンランドのレジデンス」ではフィンランドセンター、フィンランド・ダンスインフォメーションセンター、「三代目、りちやあど」ではシンガポール国際芸術祭、在本邦インドネシア共和国大使館、在京シンガポール大使館など国際的な協力や助成を得て、公演内容を充実することが出来たとともに、ネットワークを大きく広げることが出来た。

6)講師派遣等

- ・県内外の美術館や大学等に職員が委員、講師、審査員として協力し、連携や情報収集に努めた。
- ・高知国際版画トリエンナーレ、九州国立博物館、北九州市立美術館、相生森林美術館、香美市立図書館建設等検討委員会等の委員を務めた。
- ・高知市文化財保護審議会委員、高知大学・高知県立大学講師、第20回高知県障害者美術展の審査員等、外部からの依頼に応じて協力した。

7)その他

- ・「平成28年度都道府県立美術館副館長等事務責任者会議(11月10日～11日)」の開催館として会議の運営を取り仕切り、円滑に実施した。

評価案	理由
A	・調査研究、連携体制づくりなど地道な活動を続け、国内外の施設・団体との連携を強化してきた成果を共同企画展や国際共同制作作品として形にし、県民に還元しているとともに、県内外の他施設にも貢献していることが認められる。

要求水準－施設管理

施設及び設備の適切な保守管理をとおりて、故障や事故のない運営を行う

評価項目		
(1)適切な管理運営の確保	社会的責任	・法令等の遵守 ・個人情報、情報公開の状況
	建物や設備の管理	・点検、修繕の実績 ・業務委託の状況
	危機管理	・風水害、火災、地震、盗難等危機管理対策 ・マニュアルの作成 ・職員研修

状況説明
<p>(1)社会的責任</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高知県立美術館の設置及び管理に関する条例並びに指定管理に関する協定等に基づき、適切な施設の管理運営に努めるとともに、専門業者へ委託した業務に関しても関連法規に沿った施設管理を徹底させた。また、全職員に対し、労働関連法規(勤務時間、時間外命令、週休日の振替方法等)や危機管理関連法規(来館者の安全確保、館のセキュリティ確保等)、個人情報の適切な管理等について、随時確認し、徹底させている。 ・平成 28 年度中の美術館に関する開示請求はなし。 ・個人情報については、高知県文化財団個人情報保護規定に基づき、適正な収集、利用を行い、目的の終了した個人情報は、焼却処分した。 ・保管の必要のない個人情報は、随時、裁断処理している。 ・職員のパソコンには、パスワードを設定し、定期的にパスワードを変更するとともに、館外への持ち出しは原則禁止、また、USB 等は自宅に持ち帰らないことを徹底させている。 <p>(2)建物や設備の管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホール及び展示室の吊り天井耐震工事など大規模改修と連動させた修繕の年次計画を策定し、計画をもとに、日常点検や設備の更新、修繕を行った。(修繕件数:39 件 6,711 千円) ・施設の適切な管理運営のため、専門業者に業務を委託した。(委託件数:21 件 70,157 千円) <p>(3)危機管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・館職員で構成する危機管理部会を中心に「危機管理マニュアル(震災編)」「消防計画」等の改定に向けた作業を行った。館に常駐するレストラン、ショップ、委託業者の従業員も参加して、南海トラフ地震発生時を想定した避難誘導訓練を実施し(平成 28 年 10 月)、マニュアル改訂にも反映した。 ・職員通用口等で入館者の出入りを管理し、不審者の侵入を防止した。また、搬入口の2重シャッター(内・外)は、搬入口使用マニュアルに沿って、職員の許可を得て開閉することとし、不審者の侵入防止と、外気、風雨の侵入抑制を図った。

評価案	理由
B	職員や委託先などに関係法令が徹底されており、各法令に基づいて、適正な管理運営体制がとられている。

評価項目	
(2) 利用者サービスの維持向上	・利用者の意見の反映 自己点検、評価の状況 ・事故、クレームへの対応 ・職員の専門性の向上 ・研修の実施状況 ・その他サービス向上の取り組み

状況説明	
1) 利用者の意見の反映	<ul style="list-style-type: none"> ・自主事業の内容・年間の組み合わせ等は、利用者の多様な意見を勘案しながら、長期的な視点で、総合的、計画的に決定している。 ・施設・設備のハード面での意見等については、緊急性・必要性によって判断し対応している。運営に関するソフト面での意見等については、速やかに組織内で共有し、対応策を決定している。
2) 自己点検・評価の状況	<ul style="list-style-type: none"> ・企画展やホール事業ごとのアンケート調査に加え、サービス全般に関するアンケートを据え置き、来館者満足度の把握に努めた。これらのアンケート票は、職員全員で回覧するとともに、必要に応じてレストランや貸館の主催者にも伝達し、改善策を検討している。その他、職員によるサービス部会を定期的に開催し、日々の業務やアンケート等から得られた利用者のニーズや課題への対策を検討・協議し、館会議や課長会等で共有し実施に移した。
3) 事故、クレームへの対応	<ul style="list-style-type: none"> ・クレーム、要望等については、内部で協議し、速やかに対応するとともに、その状況を朝礼等で報告し情報共有した。事故に対しては、管理職に報告・相談しながら対応した。
4) 職員の専門性の向上・研修の実施状況	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な機会をとらえて積極的に職員を参加させるとともに、新採職員については、3年計画でOJT研修を進め、資質の向上に努めた。参加した研修は、劇場・音楽堂等技術職員研修(1名)、ステージラボ上田セッション(1名)、全国公立文化施設協会中四国支部業務管理研究会(1名)、財団接遇研修(3名)、財団新採研修(2名)等。
5) その他サービス向上の取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・主催展覧会ごとに、職員向けのギャラリートークを実施し、展示作品や作家に対する知識の習得に職員全体で取り組んだ。 ・館の概要を紹介するリーフレット及び2大コレクションの紹介リーフレットを多言語化(英語・韓国語・中国語(簡体字、繁体字)・タイ語)した。

評価案	理由
B	<ul style="list-style-type: none"> ・快適で安全な環境づくりを心がけ、継続的に改善に取り組んでいる。また、アンケートの要望について、可能な範囲で要望に対応する努力をしている。 ・サービス部会を定期的に開催し、サービスの向上を図るとともに、職員の専門性やスキルアップを図るため外部研修等も活用しながら積極的に取り組んでいる。

評価項目		
(3) 利用実績	利用実績の状況	・利用状況の分析

状況説明
<p>1) 利用実績の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展覧会観覧者数は 43,860 人(コレクション展 5,888 人 企画展 37,972 人)、県民ギャラリー等の貸館利用者数は 61,374 人であった。 ・美術館ホールでは、自主事業が入場者数 4,455 人、貸館事業が入場者数 40,525 人であった。 ・県民ギャラリー利用状況 H28 年度 37 件 286 日(H27 年度 36 件 263 日) <p>2) 利用状況の分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展覧会の観覧者数については、近隣県からの誘客を図る広報予算を重点的に投入したほか、県内の児童・生徒に来館してもらう事業にも積極的に取り組んだが、年間5万人以上の目標値をやや下回る結果となった(達成率約 88%)。 ・ホール事業では、ここ数年では最も高い稼働率(約 80%)となったことなどもあり、自主事業、貸館事業とも入場者数が増加した。 ・展覧会事業のほか、教育普及事業、美術館ホールの自主事業、県民ギャラリー等の貸館事業も含めた美術館事業全体の総利用者数の目標値として、年間 20 万人を設定して取り組んだが、わずかに達成に至らなかった(達成率約 92%)。

評価案	理由
B	<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会事業の入場者数は、集客力の高い巡回展が複数あった前年度を下回ったが、国内外の団体や美術館とのネットワークを活かした共同企画展の開催や、本格スタートしたミュージアムバスなど教育普及の強化により、新たな来館者の獲得に繋げるなど一定の成果を上げた。 ・ホールの自主事業では、前年度を上回る入場者数を獲得した。

評価項目		
(4) 収支の状況	経営努力	・収入増加の取り組み ・経費削減の取り組み

状況説明	
<ul style="list-style-type: none"> ・上質な企画展や公演を導入するため、情報収集に努め、見本市や展覧会視察等も積極的に行った。また、開催にあたっては、入念に計画・準備し、質の高いものを提供している。 ・広報部会を毎月開催し、広報の展開状況を検証し、改善するとともに、展覧会やホール事業ごとに特徴、特性を活かした独自の広報を検討し、実施した。媒体としてテレビや新聞の年代層に応じた活用、さらにはフェイスブックやツイッター等SNSによる情報発信に積極的に取り組み集客の増加を図った。 ・他の文化施設や企業と連携した利用料の一部減免やタウン誌への招待券提供により、効果的な誘客につなげた。 ・ホール事業を中心に国等から外部資金の獲得を図った。(文化庁、一般財団法人地域創造、美術館連絡協議会、高知県教職員互助会 計4団体 総額 29,400 千円) ・職員はもとより、委託事業者にも省エネ・省資源の意識を徹底させた。 ・入札等による委託料などの経費削減や県と四国銀行等との協定を活用し、チラシ配布経費を圧縮した。 ・展覧会入場者が目標を下回ったことから観覧料が予算を下回ったが、助成金など他の収入を上げ、委託料や燃料費などの支出を抑えることにより収支は黒字とした。 	

評価案	理由
A	外部資金の積極的な導入など収入源の多様化、安定化を図ることで展覧会入場者減による影響を最小に抑え、経費削減努力と併せて事業活動収支を黒字にするなど、取り組みに努力が認められる。

評価案	理由
A	<p>・展覧会は、バランスの取れたラインナップで企画し、これまで紹介される機会の少なかった作品や本県ゆかりの作家にスポットを当てるなど作品の選定や構成が練られている。また、企画展や公演と連動した講演会、ワークショップなどの関連イベントの開催により、多角的、多面的な理解を促進する取り組みが行われている。</p> <p>・アーティスト・イン・レジデンス事業では、県民が出演者や創作側として携わるなどアーティストと県民の交流が進むとともに、過去の参加アーティストが美術館ホールで公演を成功させるなどの成果を見せ、着実に発展している。</p> <p>・教育普及活動では、スクールプログラムとして取り組むことにより来館校数、人数とも増加するなど成果が上がっている。</p> <p>・ツイッター、フェイスブック、インスタグラムなどのソーシャルメディアも活用して効果的な情報発信が出来ている。</p> <p>・「日本におけるキュビズム」展図録が美術館連絡協議会の「2016 年優秀カタログ賞」を受賞し、これまでの地道な調査研究活動が形として評価された。</p> <p>上記のとおり、優れた管理運営・事業の遂行がなされたものと認められる。</p>

評価基準

- 「A」 要求水準を上回る成果があり、優れた管理運営・事業の遂行がされた。
- 「B」 概ね要求水準どおりであり、適正な管理運営・事業の遂行がされた。
- 「C」 要求水準に達しない面があり、改善のための工夫や努力が必要。
- 「D」 管理運営・事業の遂行が適正に行われたとはいえ、大いに改善を要する。